

令和元年6月17日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02822

研究課題名(和文) 意見文の談話展開と表現技法の特徴についての日中対照研究

研究課題名(英文) A contrastive study on the structure and features of essays by Japanese and Chinese students

研究代表者

大野 早苗 (OHNO, Sanae)

順天堂大学・スポーツ健康科学部・先任准教授

研究者番号：40364955

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：日中の大学生がそれぞれの母語を用いて書いた意見文を、主題、論拠、主張といった構成要素がどのように配列されるか、パラグラフ内で中心文からどのように文章が展開していくかという、2つの観点から比較した。構成要素の配列については、中国の学生が主題-論拠-主張という配列で書くのに対し、日本の学生は主張を最初に示す傾向が見られた。パラグラフ内での展開については、中国の学生が古典、故事の引用を多用し、技巧を凝らして書くのに対し、日本の学生は、身近な例、自分自身の体験を一般化して論じるケースが目立った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最も大きな特徴は、今まで日本語で書かれた文章に限られていた談話展開の対照分析を、日中の学生による母語で書かれた文章で行った点である。これにより、書き方の特徴について、より根本的なところで検討することができた。研究の結果は、日本語の作文教育に生かされるだけでなく、日本語母語話者と日本語学習者との互いの考え方をよく理解し、特徴を生かしあって、協働して学びを進めるための重要な情報となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the differences in the essays written by Japanese and Chinese students in their native language. The results of the study show that many Japanese students write the main claim at the beginning of the essay, while Chinese students usually tend to write it after explaining the topic and reasoning. Regarding the structure of paragraphs, many Japanese students refer to their own experiences and daily events to explain the claim of the topic sentence. On the other hand, Chinese students often use quotes from famous Chinese classics or fables to justify the claim.

研究分野：日本語教育

キーワード：作文教育 国語教育 日中対照 意見文 構成要素 表現技巧 パラグラフ内の展開

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古くは Kaplan (1966) が指摘したように、文章の書き方には書き手の母語と背景にある文化による違いがある。このことは、日本語教育の分野でも注目され、佐々木 (2000)、二通 (2001) をはじめとして、演繹型か帰納型か、問題提起・意見・実証などの構成要素がどう配列されるかなどを観点として、日本語母語話者と日本語学習者の文章の違いが研究されてきた。

こうした研究は、従来、日本語の作文指導のために行われてきたが、異なる母語と文化を持つ者が協働して学習を進めることの重要性が認識されている昨今においては、作文指導にとどまらない意味を持つと思われる。渡邊 (2007, 573) が指摘するように、書き方を学ぶことは「所与の社会共同体の成員となるために、それぞれの文化の思考プロセスや表現スタイル」を学ぶことであり、それぞれが育ってきた社会の中で身につけた書き方の違いを知ることは、考え方や表現の仕方の違いを知ることにつながるからである。

書き方には考え方や表現の仕方が現れると考えると、従来の研究は以下の点で不十分である。まず、分析の対象となっているのが日本語で書かれた文章のみであるという点である。学習者の場合、上級であっても、母語で書くのとは違って使用できる語彙や表現に制限があり、必ずしも学習者自身が望ましいと思っている書き方で書けるわけではない。また、日本語学習の過程で日本で望ましいとされる書き方を学び、日本語で書く際には、それに合わせている可能性もある。次に、談話展開の分析が演繹型か帰納型かの区別や、構成要素の配列にとどまっている点である。こうした観点からは、実証するにあたって具体的事例に重きを置く、伝統的な価値観に基づいて議論する、などといった内容面での特徴は見えてこない。また、読み手を説得するために、比喩や引用を用いる、直接的に簡潔に述べる、などといった表現の仕方の特徴もとらえられない。

以上の問題意識から、本研究では、日中の学生がそれぞれの母語で書いた意見文を対象として、談話展開の方法に加え、表現技法の特徴を分析し、比較することとした。

2. 研究の目的

本研究では、日本の大学に通う日本人学生と中国の大学に通う中国人学生に、同様のトピックを与えて母語で意見文を書かせ、談話展開と表現技法の特徴を明らかにする。中国人留学生でなく、中国の大学に通う中国人学生を対象とするのは、日本にいる留学生の場合、日本で望ましいとされる書き方を学んでおり、その影響が母語による作文にも出る可能性があるからである。

分析の観点は、構成要素 (主題、主張、論拠など) の配列、表現技法とする。構成要素の配列については、先に挙げた佐々 (2000)、二通 (2001) などでも研究がなされているが、母語で書いた場合はどうなるかが本研究における関心である。構成要素の配列と実証の論拠を分析することによって、内容面を考慮に入れた談話展開の特徴、すなわち、思考プロセスの特徴が明らかになると期待される。表現技法とは、文章に説得力を持たせるための表現の工夫であり、引用や比喩を使用する、あるいは技巧を凝らさず簡潔に述べるなどといったことがこれにあたる。

3. 研究の方法

(1) 背景としての国語教育比較

日中の学生が意見文の違いの検討、考察のために、両国の中等教育における国語教育、中でも作文教育の比較を行った。比較のために用いたのは、日本の学修指導要領と中国の課程標準、および国語教科書で、書くことの教育の位置づけや方法などを中心に両国の違いを探った。

(2) 意見文のトピック選定と意見文課題の設定

両国の学生にとって身近なトピックをいくつか選び、それらを用いたパイロット調査を経て、トピックを SNS についてのものとすることを決めた。意見文課題には、二者択一的なものやそうでないものがある。前者を用いると、意見と理由が述べやすいという面があるが (清道 2011 など)、二者から一つを選ぶ必要から文章構成がある程度決まってしまう可能性がある。そこで、意見の出しやすさを考えて、トピックである SNS に加え、それと対比的なものとして対面のコミュニケーションに言及しつつ、二者択一で意見を要求しない、以下の課題文を作成した。

近年、SNS (Social Networking Service : ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の発達はめざましく、特に若者の間ではコミュニケーションの手段として広く利用されています。SNS には、離れた場所にいる相手とも簡単にメッセージや写真のやりとりができる、友人や知人だけでなく直接に会ったことのない人とインターネット上でつながることができるなどといった、対面のコミュニケーションとは異なる特徴があります。こうしたことを踏まえて、SNS を利用したコミュニケーションについてのあなたの意見を 800 字程度で書いてください。

中国人学生向けには、中国語で同内容の課題文を作成した。ただし、字数については、中国語では日本語より少ない字数で同内容を表せることから、600 字程度とした。

(3) 意見文の収集

日本の首都圏の大学に通う日本人学生と中国広東省広州市の大学に通う中国人学生に上記の意見文課題を示し、意見文を書いてもらった。学生の専攻は、文学、経営学、教育学、工学、IT、医学、スポーツなど、多岐にわたる。なお、研究の趣旨に鑑み、大学でのアカデミック・ライティング教育の影響を排除するため、日中いずれにおいても、意見文執筆者は大学 1、2 年生の論文等執筆経験のない者に限った。また、結果に日本語教育の影響がないように、中国人学生は全て日本語学習経験を持っていない者とした。意見文執筆中は、それぞれ日本人の教員、中国人の教員が監督した。執筆の所要時間は 1 時間程度を目安とした。

(4) 意見文の分析

収集した意見文を談話展開、表現技法の特徴の両面から分析した。それぞれについての分析の観点、方法は以下のとおりである。

構成要素の配列

個々の意見文について、1 つ、あるいは内容的に統一のある連続した複数の形式段落を 1 つの構成要素としてまとめ、それが主題、主張、論拠、予想される反論（以下、反論）の 4 つのいずれに当たるかを認定し、その配列を集計した。構成要素をこの 4 つとしたのは、清道（2012, 24）が国語教科書で示される構成として、序論（問題提示や主張）、本論（理由や根拠）、結論（主張）、予想される反論を挙げていること、二通（2001）が問題提起、意見、実証の順序を分析の中心としつつ、予想される反対意見への反論にも言及していることによる。本研究で言う主題は、清道の問題提示、二通の問題提起にあたり、文章全体が何について述べるものかを示すものである。清道の理由や根拠、二通の実証は、本研究では論拠とした。

表現技法の特徴

まず、行頭の 1 文字下げを目印として文章をパラグラフに分け、そのパラグラフの中心的内容が示される文を中心文として認定した。その後、パラグラフの展開部分で何がどのように述べられるかを分析した。展開部分では、中心文で示された主張の理由づけや詳細説明がなされると予想され、また、大野・荘（2016）で指摘されているように、中国人学生は名句を引用して書くことなど、表現技法を工夫することが多いということから、以下のような基本的な分類の指針を想定し、それに沿いつつボトムアップ的に展開部を分類していった。

- ・内容面での分類

何のために：説明のために、理由づけのために etc.

何に言及するか：社会全体の事象、例、個人的体験 etc.

- ・修辞面での分類

名句の引用、比喩、故事の引用 etc.

4. 研究成果

(1) 背景としての国語教育比較

日本の学習指導要領と中国の課程標準を比較したところ、両者ともに目標として目的や必要、意図に応じて書くこと、生活や社会に目を向けることを上げている点では共通している。しかし、課程標準では授業で作文を行う回数や、授業時間内と課外での学習ともに年間に書かせる文字数が決められているなど、中国の国語教育のほうが書くことの指導に関して細かな規定がある。

この違いは国語教科書に明らかに現れており、中国の教科書の作文教育に関わるページ数、作文課題数は、日本のそれを大きく上回っていることがわかった。特に意見文に関わる部分に注目してみると、日本の教科書では、そもそも課題数が少なく、そのそれぞれの課題において、自分の立場をまず明確にすること、論理立てて説明することなどといった指導がなされるのみで、主張に至る考えの深め方、論拠の述べ方など、個々の構成要素に関する詳細な指導は多く見られない。それに対して、中国の教科書では、まず、生徒が自分なりの観点を設定し、その観点から物事を見て考えを深めるという訓練が重視されている。その上で、様々な課題を重ねていくにしたがって、論拠の選び方と使い方、論証の方法というように、順次学習していくことになっている。

さらに、中国の作文教育を考えるとときに無視できない存在として、大学入試のための共通テストがある。このテストでは、毎年、作文問題があり、その配点が大きいため、入試対策としても作文が熱心に学ばれる状況がある。テスト対策

表1 意見文の全体構成

構成要素数	展開パターン	日本	中国
2	論拠 - 主張	10	1
	主張 - 論拠	3	0
3	主題 - 論拠 - 主張	19	49
	主張 - 論拠 - 主張	23	13
4	主題 - 主張 - 論拠 - 主張	2	7
	主張 - 論拠 - 反論 - 主張	6	1
5	主張 - 反論 - 論拠 - 主張	3	1
	主題 - 主張 - 論拠 - 反論 - 主張	2	0
	主題 - 論拠 - 主張 - 反論 - 主張	2	0
	主張 - 反論 - 論拠 - 反論 - 主張	1	0
その他		2	1

(2) 構成要素の配列

日中の学生それぞれ 73 名分の意見文について、その構成要素（主題、主張、論拠、予想される反論）の配列により分類したと

ころ、表1のようになった。表1からわかるように、日本人学生の場合、最も多いパターンは、[主張-論拠-主張]というもので、23名の意見文に見られた。次いで多かったのが、[主題-論拠-主張]で、19名の意見文に見られた。この二つを合わせると42名となり、三つの構成要素で書くことが多いとは言えそうであるが、他の展開パターンへのばらつきも多く、基本的な書き方として共有されているとまでは言えそうにない結果となった。一方、中国人学生は、[主題-論拠-主張]というパターンで書いた者が49名と極めて多く、それに次ぐ[主張-論拠-主張]の13名を大きく上回っている。その他の展開パターンへのばらつきは少なく、[主題-論拠-主張]が基本的な書き方となっていることがわかった。

また、日本人学生には[論拠-主張][主張-論拠]のように、主題を述べずに書く者が目立つように思われたことから、主題の有無を観点に結果を整理した結果が表2である。表2からわかるように、日本人学生では、主題を書いている者が25名、書いていない者が46名であった。一方、中国人学生では、主題、つまり、これから始まる文章

表2 主題の有無

	展開パターン	日本		中国	
主題あり	主題 - 論拠 - 主張	19	25	49	56
	主題 - 主張 - 論拠 - 主張	2		7	
	主題 - 主張 - 論拠 - 反論 - 主張	2		0	
	主題 - 論拠 - 主張 - 反論 - 主張	2		0	
主題なし	論拠 - 主張	10	48	1	17
	主張 - 論拠	3		0	
	主張 - 論拠 - 主張	23		13	
	主張 - 論拠 - 反論 - 主張	6		1	
	主張 - 反論 - 論拠 - 主張	3		1	
	主張 - 反論 - 論拠 - 反論 - 主張	1		0	
	その他	2		1	

がSNSについてであることを示す部分があるものが56名と大勢を占め、主題がない者は16名であった。日本人学生が主題に触れないまま、つまり、文章がSNSについてのものであることを所与の前提として、いきなり「私はSNSの利用に反対です」などというように、自分の主張や論拠を述べることにについては、これまでに書いてきた意見文が大学入試の小論文のように、出題として課題を与えられて、その解答を書くという意識で意見文を書いているのではないかと思われた。

また、主張と論拠のどちらを先に述べるかは、しばしば議論の展開方法として演繹的なものと帰納的なもののいずれを好むかということと結びつけられるものであるが、その観点から整理した結果が表3である。日本人学生では、主張を先に述べる者が40名とやや多く、論拠を先に述べる者が31名であった。中国人学生の場合は、論拠を先に述べる者が50名と、大半を占めた。この中国人学生の書き方は、上述の中等教育における国語教育の影響をうかがわせるものであった。SNSについてどういう観点から述べるかを文章の主題として冒頭に置き、その観点から論拠を述べて結論としての主張に至るという展開になっているわけである。

表3 主張と論拠の順序

	展開パターン	日本		中国	
主張が先	主張 - 論拠	3	40	0	22
	主張 - 論拠 - 主張	23		13	
	主題 - 主張 - 論拠 - 主張	2		7	
	主張 - 論拠 - 反論 - 主張	6		1	
	主張 - 反論 - 論拠 - 主張	3		1	
	主題 - 主張 - 論拠 - 反論 - 主張	2		0	
	主張 - 反論 - 論拠 - 反論 - 主張	1		0	
論拠が先	論拠 - 主張	10	31	1	50
	主題 - 論拠 - 主張	19		49	
	主題 - 論拠 - 主張 - 反論 - 主張	2		0	
その他		2	2	1	1

(3) 表現技法の特徴

表4は、日中の学生それぞれ66名の意見文を、パラグラフの中心文に対して展開部分で何が述べられるかを観点に分析したものである(数字はそれぞれの出現回数。展開部分で複数のことが述べられる場合はその全てをカウントした)。

まず、目に付くのは、中国人学生が支持文で述べたことからの多さであり、日本人学生の合計274に対して693となっている。内容的なものを見てみると、中国人学生は社会全体に起きていることに言及する頻度が非常に高く、日本人学生は社会全体に起

表4 展開部で何が述べられるか

何がどのように述べられるか	日本		中国	
< 内容的なもの >				
社会全体に起きていることをもとに説明する	16	103	124	242
社会全体に起きていることをもとに議論を展開する(原因・理由、帰結、反論等として挙げる)	87		118	
しばしば見られる例をもとに説明する	70	90	102	110
しばしば見られる例をもとに議論を展開する	20		8	
報道等で知られた事例をもとに説明する	3	3	10	12
報道等で知られた事例をもとに議論を展開する	0		2	
個人的体験をもとに説明する	28	29	7	9
個人的体験をもとに議論を展開する	1		2	
道理や真実と思われることをもとに説明する	0	9	9	32
道理や真実と思われることをもとに議論を展開する	9		23	
見解・感想を表明する	37	37	52	52
< 修辭的なもの >				
有名な言葉を引用する	1	3	46	236
よく使われる言葉を借用する	0		43	
有名な言葉のパロディを用いる	0		5	
比喩を用いる	1		61	
情景描写を用いる	1		50	
故事に言及する	0		7	
成句や諺を用いる	0		24	
計	274		693	

きていることと同様、しばしば見られる例にも頻繁に言及している。また、日本人学生は個人的体験を、中国人学生は道理や真実をもとに論じる場合が多いことも特徴的である。修辭的なものについては、日中の差が顕著である。日本人学生は修辭的な技法をほとんど使わず、中国人学生は引用、比喩、情景描写などを駆使して書いていることがわかった。

<引用文献>

大野早苗・莊嚴(2016)「インタビュー調査からみる中国人留学生が母国の学校教育で学んだ文章の書き方について 作文参考書の利用を中心として」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, 74-82.

佐々木泰子(2000)「課題に基づく意見の述べ方 日本人大学生の場合・日本語学習者の場合」『本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11・12年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(2)研究成果報告書(研究代表者:宇佐美洋), 219-230.

清道亜都子(2011)「課題状況が高校生の意見文作成に及ぼす効果」『中部教育学会紀要』11, 40-54.

二通信子(2001)「アカデミック・ライティング教育の課題 日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から」『北海学園大学学園論集』110, 61-77.

渡邊雅子(2007)「日・米・仏の国語教育を読み解く-「読み書き」の歴史社会的考察」『日本研究』35, 573-619.

Kaplan(1966) Kaplan,R.B.(1966) “Cultural Thought Patterns in Intercultural Education,” *Language Learning* 16, 1-20.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

大野早苗・莊嚴(2018)「中国語文(国語)教育事情 「中華人民共和国教育部普通高中語文課程標準(実験)」(2003年)の紹介」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10, 72-80.

大野早苗(2019)「日本人学生と中国人学生の母語による意見文の構成の違い」『月刊 国語教育研究』564, 42-49.

[学会発表](計3件)

莊嚴・大野早苗(2016)「中等教育で教えられる書くことの日中比較 - 「学習指導要領」と「課程標準」及び必修の国語教科書を中心に - 」中国語教育学会 2016年度第1回研究会 於早稲田大学

大野早苗・莊嚴・羅曉紅(2018)「母語による意見文の日中比較 パラグラフ構成を中心に」第44回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会, 於東京海洋大学

大野早苗・莊嚴・羅曉紅(2018)「日本人学生と中国人学生の母語による意見文の構成の違い」2018年日本語教育国際研究大会 於カフォスカリ大学(イタリア)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 莊 嚴

ローマ字氏名: ZHUANG, yan

所属研究機関名: 秀明大学

部局名: 観光ビジネス学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 70348415

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。